

| | |
|---------|---|
| 氏名（本籍） | きむ じんな 金 眞 那（韓国） |
| 学位の種類 | 博士（学術） |
| 学位記番号 | 甲第 112 号 |
| 学位授与年月日 | 平成 27 年 3 月 23 日 |
| 学位授与の要件 | 広島市立大学大学院学則第 36 条第 2 項及び学位規程第 3 条第 2 項の規定による |
| 学位論文題目 | 在日コリアンにおける企業家活動の分析 —エスニック・アイデンティティとエスニック・ネットワークの概念を用いて— |
| 論文審査委員 | 主査 教授 金 泰旭 委員 教授 宇野 昌樹 委員 教授 中島 正博 委員 准教授 秋庭 太（龍谷大学） |

論文内容の要旨

本研究の課題は、在日コリアンの企業活動を、その企業家活動を中心に分析していくことである。めまぐるしく変化していく経営環境の中で進化し続けている在日コリアン企業を分析するために本研究ではまず、従来の在日コリアン企業に対するレビューを行った上で、企業家活動、ネットワーク、アイデンティティに関する先行研究を在日コリアン企業と関連付けて論じた上で、それぞれの先行研究の貢献と限界とを明らかにした。その後筆者はミクロ的なアプローチとマクロ的なアプローチを取り入れた独自の分析枠組みを提示することでこれまでに解明できなかった在日コリアン企業家とエスニック・ネットワークとの関係性、またエスニック・アイデンティティとエスニック・ネットワークとの関係性について分析することを可能にしている。

事例分析においては広島に根ざしている在日コリアン企業の 2 社を取り上げ、事業変遷の過程を詳細に紹介するとともに分析枠組みに沿って両社の事業活動とエスニック社会やネットワークとの相互関係性を分析しておく。

結論として一般的な企業活動と同様に在日コリアン企業に於いても企業家活動は非常に重要な役割を果たすとともにエスニック・アイデンティティとそのネットワークが企業活動に多大な影響を及ぼすとともに事業の安定化とともにエスニック・ネットワークや団体への貢献が増進していく。また企業家自身もエスニック社会への支援活動に回ると同時にその活動が企業活動と直接的な関連がなくても長期的にみてエスニック社会の繁栄と発展に繋がるものでしたら積極的に関わっていく傾向がある。

本研究のインプリケーションとしては、在日コリアン企業を分析するために企業家活動、エスニック・アイデンティティ、ネットワークなどの先行研究を丹念に行った上で総合的かつ独自の分析枠組みを提示していることが挙げられる。今後は事例分析対象の多様化と分析枠組みの精緻化と定量研究への挑戦が求められるだろう。

【論文の概要】

本論文のタイトルは、「在日コリアンにおける企業家活動の分析—エスニック・アイデンティティとエスニック・ネットワークの概念を用いて—」である。このタイトルから分かるように、本研究では、在日コリアンの企業家活動を分析することを目的としているが、在日コリアンの企業家活動を分析するにおいて、エスニック・ネットワークとエスニック・アイデンティティという概念を用いることが本研究の独創的な特徴となっている。

第1章では、エスニック・ビジネス、企業家活動、ネットワーク、アイデンティティに関する先行研究を概観している。第1節のエスニック・ビジネスに関する先行研究では、在日コリアン以外のエスニック・ビジネスとの比較を通じて、在日コリアン企業の特徴を考察している。第2節の企業家活動に関する先行研究では、金井（2002）が提示する起業家活動の四つの要件を参考に、在日コリアンにおける特定地域の産業集積や在日コリアン企業の優位性の議論から、在日コリアン企業と企業家活動との接点を考察している。第3節のネットワークに関する先行研究では、在日コリアンの企業家活動を分析するにおいて、祖国社会とエスニック社会だけでなく、経営活動の現場となる日本社会を始め、在日コリアン企業を取り囲んでいる複雑な社会環境とのネットワーク関係を考慮する必要があると述べている。第4節のアイデンティティに関する先行研究では、アイデンティティは変化する関係性の中で流動性をもつと主張している研究に注目するとともに、在日コリアンのエスニック・アイデンティティの維持に対する研究の必要性を述べている。第5節では、先行研究の貢献と限界を考察しており、本論文におけるリサーチクエスチョンを提示している。

第2章では、エスニック・ネットワークとエスニック・アイデンティティを用いて在日コリアンの企業家活動を分析するための独創的なフレームワークを提示している。本論文は、在日コリアンの企業家活動を分析するものであるが、それを分析するためのミクロ的な要素として在日コリアン企業家のアイデンティティを取り上げている。逆にマクロ的な要素としてはエスニック・ネットワークを取り上げており、更にマクロな要素として在日コリアンを取り巻く社会環境を取り入れている。そして、これらの要素は互いに影響を及ぼすと述べている。

第3章の第1節では、在日コリアン企業である(株)海田金属を対象に事例研究を行っている。(株)海田金属の初代社長は、古鉄を集めて製鉄会社に販売するスクラップ（古鉄業）に参入し、二代目である現社長とシャーリング（切断）を始めとする金属加工業へと事業転換を行ってきた。2008年度には、リーマンショックの影響で、金属加工業全体に莫大な悪影響を及ぼしたが、(株)海田金属は、同業他社にはできない大胆な設備投資を行うことで経済危機を乗り越えてきた。一方、初代社長と現社長は、在日コリアンとして在日本大韓民国民団や在日韓国商工会議所広島支部において重責を果たしている。

第3章の第2節では、(株)海田金属と同じく、在日コリアン企業である(有)備北清掃社を対象に事例研究を行っている。(有)備北清掃社の初代社長は、リヤカーを用いた屎尿収集業に参入し、その後、バキュームカーを導入することで顧客の満足度を高めていた。現在は、行政から許可を取得した形で、広島県内における産業廃棄物の処理を担っている。(有)備北清掃社の現社長も在日本大韓民国民団の団長を務めており、エスニック・ネットワークを構築している。

第4章では両社の比較事例分析と結論を述べている。両社の草創期を比較すると、創業者は母国の厳しい状況により来日したことと、知り合いの在日コリアンからの紹介で事業機会を認

識していることは類似しているが、参入する産業が異なるため、コア資源および事業コンセプトと事業計画の内容は異なっている。変革期になると、両社ともに、エスニック・ネットワークではなく、日本社会のネットワークからの影響が強くなっている。また、両社の初代社長は在日コリアンを採用したり、エスニック団体の役職を務めたりすることで、エスニック社会に貢献している。両社の現社長はこのような父親の姿を見て育ち、エスニック団体の役員を務めていることで、日本社会への貢献も心がけている。但し、事業の特性上、(株)海田金属の社長は、事業活動において日本名を使っているが、(有)備北清掃社の社長は日本名を使っていない。つまり、両社の事業上の特性や環境が異なるため、事業コンセプトと計画、資源、日本名使用の有無などは相違しているが、幼い頃から構築しているエスニック・ネットワークとそれによるエスニック・アイデンティティの確立過程は類似しており、企業家活動を促進する要因となっている。

結論として、初代社長の時代は、エスニック・ネットワークの構築が直接的にも間接的にも事業活動に役に立つと考えられていたため、エスニック・ネットワークを維持してきたと考えられる反面、両社の現社長の場合、幼い頃からエスニック団体で活動している父親の姿を見て育ち、エスニック団体が在日コリアンや在日コリアン企業のために行ってきた歴史を接したことで、自分もエスニック社会に貢献していきたいというエスニック・アイデンティティを形成したことで、エスニック・ネットワークを維持し続けていると考察している。

また、両社の初代社長の場合、事業機会の認識と資源獲得において、直接的で明確な影響を受けており、在日コリアン企業家はどちらかというところ、エスニック社会の支援もしくは影響を受ける側だったといえる。その反面、両社の現社長の場合、エスニック・ネットワークを維持することによる自社への直接的なメリットは少なく、エスニック・ネットワークを維持することによる企業家活動への直接的な影響は弱くなっている。

但し、両社の現社長のようなエスニック・ネットワークの維持を通じたエスニック社会への貢献は、他の在日コリアンの企業家活動を促進すると述べ、在日コリアン企業家が日本社会においてエスニック・ネットワークを維持させていくことは、周りの在日コリアンの企業家活動を促すことを示唆している。

終章ではインプリケーションと今後の課題を述べている。インプリケーションとしては、企業家活動を分析するにおいてエスニシティの事例を取り入れたこと、在日コリアン企業家をより総合的に分析するための独自の分析枠組みを提示していることを挙げている。限界としては、本論文における事例対象は民団系のエスニック・ネットワークを構築している企業だけであり、総連系のエスニック・ネットワークを有している事例は取り上げていないこと、エスニック・アイデンティティを構築・維持しているケースだけを対象にしており、エスニック・アイデンティティを消滅しているケースとの比較研究も求められると、エスニシティ企業家の企業家活動が他のエスニシティの企業家活動を促進させることが検証できていないことを取り上げている。

論文審査の結果の要旨

1. 口頭試問及び公聴会の概要

本審査会は外部審査委員として秋庭太先生（龍谷大学経営学部）を迎え、2月6日午前9時

15分より口頭試問、続いて10時より博士学位論文発表会（公聴会）を開催した。

試問では申請者が論文の概略および予備審査で指摘された課題についてどのように修正したかを説明した後に、研究内容に関する質疑応答が行われた。

予備審査で指摘された課題点に関しては、日本語の表現を **native check** を受けて修正していること、事例分析や考察の内容を十分に補填していること、図表や先行研究の形式、引用文献および参考文献、脚注の表記を改めていることなど提出者からの修正事項に関するご報告があった。

審査委員からは、その上でネットワークから事業機会を認識したり資源を獲得したりすることは、在日コリアン企業家だけでなく、普遍的であると考えられるという指摘があった。それに対して提出者からは在日コリアン企業の事業活動も一般的な特性を持つとともに独特な事業展開の特徴も同時に存在すると説明した上で、より論文の完成度を高めるために若干の表現修正や加筆を検討することとなった。

また、他の審査委員から在日コリアンのエスニック・アイデンティティを考察するにおいて、血縁、地縁、宗教との関係性に対する更なる記述を求められたために修正加筆を行うことになった。なお、今後の課題の加筆修正と在日コリアンのネットワークの特殊性に関する追加記述が求められた。

また別の審査委員からなぜ在日コリアンがエスニック・アイデンティティを形成して、敢えてパブリック・ネットワークを構築するのかに対して、在日コリアン企業家のもっと内面的な考えを描写してほしいという要請があった。在日コリアンのエスニック・ネットワークにおいて、企業家支援がうまく行われているとしたらその理由は何であるかを明らかにしてほしいというご指摘と論文に取り入れている金井の議論をもっと深層的に検討する必要があるというご指摘とアドバイスなどが寄せられた。

2. 審査結果の概要

これらの口頭試問と公聴会終了後、審査委員のみによる合格判定のための会議を別途開催した。委員からは更なる事例分析対象の多様化による研究の一般化への課題と結論のインパクトが弱い印象を受けるというご指摘と日本語の表現の更なる修正が要求された。

とはいえ、本研究は在日コリアンの事業活動について先行研究を丹念にレビューし、独自の分析枠組みを提示した上で、幾度に渡るインタビュー調査や未刊行資料（内部資料を多数含む）などの第一次データを沢山含んでいて堅実に事例分析を行い、論理展開の整合性が取れている点においては審査委員全員が一致して非常に高く評価した。また、これまでに本研究に関する査読論文一点を公表するとともに、学会報告も数件実施している点も高く評価された。さらには、本研究と関連したファミリー企業のビジネスモデルに関する研究が既に出版されている点は、特に本論文のレベルの高さを客観的に示すものと評価された。

3. 結論

以上を踏まえ、本審査委員会では、本学位審査請求論文が博士論文に必要とされる要件を十分満たしており、また口述審査における回答も良好であると認められたため、本論文の親筆者金 眞那氏に対して 博士（学術） を与えることについて、全員一致で承認する。